

2018年度 東北文化研究室 公開講演会

今、方言とどう向き合うか ― 実践方言学の世界 ―

2018年11月17日（土）14：00～16：30

東北大学川内北キャンパス講義棟B棟 B200講義室

- 趣旨説明** 実践方言学の世界 小林隆（東北大学大学院文学研究科教授）
- 講演 1** 方言をどう生かすか―教育・継承の現在―
竹田晃子（立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員）
- 講演 2** 方言で安心・安全―医療・看護・福祉と方言―
今村かほる（弘前学院大学文学部教授）

企画趣旨

現代人にとって、“方言”とはどんな存在だろうか。邪魔なものだろうか、あるいは、大切なものだろうか？ 方言はコミュニケーション障害の要因になるという側面があるが、その一方で、地域社会のアイデンティティの基盤として次世代への継承が重要視されるようになってきている。また同時に、方言の活性化が地域社会の活性化に繋がるという面もある。現在、このような方言に対してどのように向き合うのかという実践的な課題に答えようとするのが、近年新たに切り開かれてきた実践方言学という研究分野である。

そこで、本講演会では、この実践方言学につき、この分野の概況の報告、この分野で活躍する講師による実践に関する講演、そして、それらに対する質疑を行い、今、方言に対してどのように向き合っていくのかということを考えていくことにした。（大木一夫）

趣旨説明

実践方言学の世界

東北大学大学院文学研究科・東北大学方言研究センター教授 小林 隆

現代人にとって“方言”とはどんな存在だろうか。邪魔なものだろうか、それとも大切なものだろうか。今回の講演会では、近年、注目されつつある実践方言学の視点から、現代に生きる私たちが方言とどう向き合えばよいか考えていきたい。

まず、東日本大震災の被災地の人々の声を聞いてみよう。

●方言というのは、被災地にとっては、土のにおいのするふるさとの一つで、心が温かくなるものだ。どんなにか人の心を和らげ、癒し、落ち着かせるものか、今回の震災であらためて思い知った。「どうしましたか」より「あんだ大丈夫すかー、なじよしたのー」と言われた方が、うんと心が通う。 (名取「方言を残そう会」金岡律子さん)

●自分自身、家族やたくさんの友人を失っているせい、共通語の「がんばろう」という文字を見ると、ときどき腹が立つんです。何ががんばろうだ、これ以上何をがんばれと言うんだ、と思うんです。でも、「がんばっぺし東北」とか「まげねぞ宮城」と方言で書いてあると、「んだんだ、まげねえ！」と思うんです。 (宮城県Aさん)

今や方言は、ふるさとと私たちを結びつける絆であり、そこに暮らす人々の心の拠り所となっている。方言は、現代人にとって、コミュニケーションに血を通わせる大切な存在と言える。

一方で、支援者の声に耳を傾けると、こんな声も聞こえてくる。

●ズーズー弁のせいで、地名の発音が理解できずに困った。 (東京の支援者)

●「テレビ、ナゲテケロ」と言われ、「捨てる」の意とは知らずとまどった。 (広島の支援者)
こうしてみると、方言は意志疎通を妨げるものであり、コミュニケーションの障害となる場合のあることがわかる。人と人との間に垣根を作る、邪魔な存在でもあるわけである。

現代人にとって、方言はこのように大切なものでもあり、邪魔なものでもある。だとすれば、それと向き合うために、「大切な方言」がもつ心理効果を最大限に発揮させ、「邪魔な方言」が引き起こすコミュニケーション上の障害を取り除く、そんな方言学があったらいいだろう。今や、現代社会に役立ち、私たちの生活を潤すような実用的な方言学が必要になってきた。実践方言学の登場である。方言学が内包して来た「日常の学」「市民の学」としての課題の種が、東日本大震災という不幸な出来事をきっかけに、一気に成長を始めたのである。

一七 今回の講演会は、そうした研究の先頭に立つお二人にお話をうかがうことにした。

【関連するウェブサイト】

- ・実践方言研究会：<https://www.ad.ipc.fukushima-u.ac.jp/~p002/jissen/index.html>
- ・東日本大震災と方言ネット：<https://www.sinsaihougen.jp/>